令和８年度
茅野市非核平和事業
「非核平和作文コンクール」最優秀作文集



令和８年８月

茅　　野　　市

はじめに

昭和 20 年８月、広島・長崎が原子爆弾によって受けた被害は非常に大きく、そこで暮らしていた多くの人たちの尊い生命が奪われました。かろうじて生き残った人たちも、原爆のため体と心に大きな傷を負い、81 年たった今も原爆の傷は消えません。

世界で唯一の被爆国の国民として、茅野市は昭和 59 年６月、核兵器の廃絶と世界の恒久平和を祈念して「非核平和都市」を宣言し、毎年、非核平和への取組を行っています。

その中で、私たちは、原爆パネルや被爆者の描いた絵を見て、原爆や戦争の恐ろしさと平和がどんなに大切かということを学びました。

しかし、誰もが平和を願いながらも、今も世界中で戦争や紛争が続いていて、悲しい思いをする人たちは後を絶ちません。そして、今も世界中に核兵器が存在しています。

今、私たちはこれまで学んだことをもとに、本当に平和な世界を、みんなで力を合わせて築いていかなければならない、と思いを新たにしました。

そして、まず自分たちでできること、それは、この平和学習をただ「怖かった」という感想で終わらせるのではなく、次につなげるために、たくさんの人たちが悲惨な思いをして亡くなったということ、そのことをきちんと受け止め、語り継いでいくことだと強く感じました。

ここに、今年、非核平和に対する思いを市内の中学２年生がつづった「非核平和作文コンクール」の最優秀作文をまとめました。

目　　次

					ページ
永明中学校	２年１部	松澤	蒼太	世界は平和を知らない	2
〃	２年３部	小松	祐生	平和はほほ笑みから	4
北部中学校	２年２部	中西	桐吾	「正義」の在処	6
〃	２年３部	伊藤	一穂	知ることから始まる未来	7
長峰中学校	２年３組	鷹野	柚珠奈	平和の世をこれからも願い続けて	9
〃	２年３組	武井	唯華	祈りと叫び	10
東部中学校	２年２組	内藤	恭花	被爆国の私たち	11
〃	２年３組	五味	芯太郎	人と兵器	12

平和への誓い（令和８年広島平和記念式典より） 13

世界は平和を知らない

永明中学校　２年１部　　松澤　蒼太

僕は長野県に生まれてきた、普通の中学生です。でもこの世界には、今でいう普通の日常生活が送れず、生まれることすら許されなかった子達が沢山います。そして、日本は戦争を起こした国です。しかし、その戦争を起こした国で被爆した者達の命は決してなかったことにはなりません。今生きている僕達が、その過ちを伝えていかなければいけません。僕らから日本へ、日本から世界へと、繋いでいきます。

そうした戦争を知るため、僕の学校では戦争についてのパネル展などが開かれました。そこには今の僕らでは想像できないような残酷な姿がありました。たくさんの悲惨な資料が並ぶ中、僕が何気なく足を止めた一枚のパネルには、一人の少女の写真が写っていました。名前は佐々木禎子さんです。広島で二歳の時に被爆し、その十年後に原子爆弾の後遺症である白血病を発症して、十二歳という若さで亡くなった女の子でした。パネルに書かれた彼女の短い生涯を読み進めるうちに、僕は胸が締め付けられるような思いをしました。なぜなら、十二歳という年齢は今の自分の年齢とほとんど変わらないからです。

禎子さんは入院中、「鶴を千羽おると病気が治る」と信じ、病床で一生懸命に鶴を折り続けていました。どんなに体が痛く苦しくても、周りの人に心配をかけまいと、決して笑顔を絶やすことはなかったそうです。パネルには、彼女が実際におった折り鶴の写真も展示されていました。一心一心に「生きたい」や「また学校へ通いたい」という強い願いが込められていることが、写真越しに痛いほど伝わってきました。しかし、その必死の思いは届かず、禎子さんは短い生涯を終えてしまいました。そんな禎子さんが最後に口にした言葉は、お父さんが運んでくれたお茶漬けへの「おいしい」という一言だったと知り、僕は涙が止まりませんでした。

このパネル展を見るまで、僕にとって戦争や原子爆弾は、教科書や歴史の中の、「遠い昔の出来事」でした。しかし、自分と変わらない年齢の少女が、突然襲ってきた原爆の影によって未来を奪われた、という事実を知り、戦争の恐ろしさが一気に、現実味を帯びてきました。毎日当たり前のように学校に通い、友達と笑って遊ぶという「当たり前の日常」は、禎子さんのように、生まれてきてもその人生を奪われてしまった子供達が、心から望んでも手に入れられなかった、かけがえのない大切な時間だったのだと気づきました。

現代に目を向けると、世界では今もなお、紛争や戦争によって多くの命が落とされています。ニュースで流れる爆撃の映像や、泣き叫ぶ人々の姿は、かつての広島や長崎で起きた悲劇と重なって見えます。技術が進歩し、時代が変わっても、人間はまた同じ過ちを繰り返しています。過去の悲惨な歴史があってもなお、この世界はまだ本当の平和を知らないのではないかと、強い不安と悲しさを覚えさせられます。戦争は、人々の日常から全ての「色」を奪い、灰色に変えてしまいます。だからこそ、平和を知らない今の世界に、戦争を起こした国として、昔話だと片付けるのではなく今を生きる僕達が平和を投げ掛けなければならないと感じました。

世界中の誰もが怯えることがなく、自分らしく笑顔で生きられることこそが、本当の平和ではないでしょうか。しかし、現実に目を向けると、まだその平和を知らない国や人がたくさん存在します。だからこそ、その平和な未来をつくるために、僕達一人一人の小さな行動の積み重ねが必要で、それが未来を変える強い力になります。

僕は禎子さんのパネル展を通して、これから二つのことを実践したいと思います。一つ目は、世界の現状や過去の歴史から目を背けるのではなく、「知り続けること」そしてそれを「伝えていくこと」です。本当の平和をまだ知らない世界だからこそ、僕たちは声をあげ続ける必要があります。二つ目は自分の身の回りの人に対して「思いやりの心」を持つことです。自分の意見を押し付けるのではなく、相手の立場になって考えてみたり、相手の言葉に耳を傾ける。そんな小さな優しさの連鎖が、いじめや差別をなくし、みんなが願う平和へと繋がると信じています。

戦後から長い年月が経ち、戦争の記憶を持つ人は減少し、記憶の風化が叫ばれています。だからこそ、パネル展などを通してバトンを受け取った僕達が、過去に戦争で犠牲になった子たちの命を胸に刻み、次の世代へと本当の平和の尊さを繋いでいく使命があります。一人一人が願いを込め、折り鶴を折るように、小さな優しさを積み重ねていくことこそが、禎子さんたちの願いに応え、本当の平和を知らない世界を平和に変えるための、確実な第一歩になるのだと僕は信じています。

平和はほほ笑みから

永明中学校　２年３部　　小松　祐生

最近私の家族に大きな変化があった。愛して止まない祖母が亡くなったのだ。ご馳走を作り、笑顔で毎週末迎えてくれた祖母は私の心の拠り所だった。そんな大好きな祖母の納骨を前にして、祖父から私たちにお願い事があった。「おばあちゃんの戒名と一緒に嘉人伯父さんの戒名も墓誌に刻んでほしい。」と。

さて、嘉人伯父さんとは一体どのような方なのか。伯父が祖父の一番上のお兄さんであることは知っていても詳しいことは分からない。そこで私は、自分のルーツを紐解くファミリーヒストリーとして、伯父の話を深く聞きたいと願った。祖父や母から初めて聞かされるエピソードの数々は、まるで日本の歴史の教科書の記述のように思えた。いつも手を合わせる仏壇上に、曾祖父母と共に凛々しいお顔をしてこちらを見守ってくれているのがその伯父だと改めて理解した。年の離れた弟である祖父の大学の学費を仕送りするような兄弟思い・家族思いの方だった。その伯父は戦争中広島に動員された。終戦後、再び故郷の子供たちとささやかな幸せを噛みしめ教員生活を送っていた最中、体に異変が生じる。ピカドンと呼ばれた原子爆弾の放射能を浴びた伯父は、いわゆる原爆後遺症といわれる白血病で長いこと病に伏してしまう。葬儀には当時の同僚の先生方や教え子の皆さんが大勢参列されたという。その時読まれた弔辞も大切に保管されており、それを読んだ私は胸がつぶれる位苦しい気持ちになった。その文面から、伯父が教育者としても人としても愛され惜しまれていたことがよく分かった。戦争が終結して、ようやく日常生活を取り戻そうとしていた矢先に病魔に倒れた伯父の、どこにぶつけていいか分からない苦しみや悲しみの叫びが私には聞こえるようだ。私は、戦闘が止んだ後も悲しみの連鎖が続く点に原爆の恐ろしさややりきれなさがあると強く思う。

八時四十五分。広島が赤い海に包まれた。一瞬にして無数の尊い命とかけがえのない日常全てを原子爆弾が奪い去った。多くの人が重度の火傷で苦しみ命を落としていった。助かった人も大量の放射線を浴び、白血病によって何百人もの人が亡くなった。その中に、一人の少女がいた。その名は佐々木禎子さん。禎子さんは二歳の時に広島で被爆し、千三百羽以上の折り鶴に「生きたい。」と願いを込め、十二歳の時に白血病で亡くなった。その願いは原爆の子の像として伝わる。折り鶴を高く掲げた少女が、穏やかで平和な未来へと橋渡しをしてくれているように感じられる。

しかし現実は厳しい。ロシアとウクライナの戦争が長期化している。今もなお、世界では多くの血が流れ涙が溢れる。なぜ戦争や紛争が相変わらず絶えないのか。戦争は、たとえ多大な利益を得られたとしても大きな犠牲を払う。冷静に考えれば、武力で威圧することで相手を押さえることの無意味さも明らかである。価値観や倫理観の違い、そして、コミュニケーション不足によって起こるのだろうか。必ず誰かが傷つく戦争が問題を解決する最良の選択だとはとても思えない。双方の主張が正しいとしても、お互いに相手の意見に耳を傾け、歩み寄らなければ衝突は起こる。常に相手の視点に立つことで、新しい最善の解決策が生まれる。相手を論破するのではなく、尊重し合う関係を築くことが平和な世の中への第一歩だと私は考える。案外、デリケートで難しい問題をは

らむ世界平和への道と、私が小・中学校の友人と円滑な人間関係を築くために体得してきた心得とは根本的に同一なのではないかと考える。禎子さんは道半ばで天国へと旅立ったが、その魂を受け継がなければならない。私より若いのに死を感じながら生を全うしている姿が素晴らしいし、病気に侵されても自分のことだけでなく世の中全体の平和を願う視野の広さに心打たれる。

禎子さんが追い求めていた「誰もが幸せな日々」を実現するため私に一体何ができるだろうか。先日の平和学習の後自分なりにいろいろ考えた。「平和って何だろう。」と真剣に自問自答した。その時、ふと尊敬するマザーテレサの言葉が私の頭をよぎった。

「平和は微笑みから始まります。」

幼少期に伝記を読んでから、自分の利益を追求せず、誰に対しても分け隔てない言動のマザーテレサの優しさに憧れ続けている。目の前の人に微笑みかけ、日々の思いやりや愛から平和な社会が実現できると説く。ちっぽけかもしれないが、私の心がけ次第で私の周囲に平和の輪が広がると想像する。これほどワクワクすることはない。禎子さんや嘉人伯父さんの思いを背負っていきたい。そして、マザーテレサが言うように、屋根のある家で温かい食事を家族と囲み、お腹一杯食べられること、学校で勉強ができること、ふかふかの布団で寝られることが平和の証であると理解し、深く感謝できる人間でもありたい。

「正義」の在処

北部中学校　２年２部　　中西　桐吾

僕たちは幼いころから、「正しいことをしなさい」と教えられる。しかし、正しさとは本当に一つしかないのだろうか。僕は平和について考えるとき、まず「正義とは何か」という問題に向き合わなければならないと思う。
世の中には争いが絶えない。戦争も、国家や人々がそれぞれ自分たちの正義を信じているからこそ起こる。平和を守るための戦争だと主張する国もあれば、自由を守るための戦いだと考える人々もいる。誰もが自分は正しいと思っているのに、なぜ悲劇はなくならないのだろうか。

僕は、正義には大きく二つの考え方があると思う。一つは、多くの人を救うことを優先する正義である。例えば、百人を救うために一人を犠牲にしなければならない状況があったとする。この考え方では、より多くの命が助かる選択が正しいとされる。結果を重視する合理的な考え方であり、社会全体の利益を考えれば納得できる部分もある。しかし、もう一つの正義もある。それは、たとえ一人であっても見捨ててはならないという考え方だ。一人の命にはかけがえのない価値があり、数の大小では比べるべきではない、いや、比べることができないものであるからだ。もし自分が犠牲になる側だったら、「多くの人のためだから仕方ない」と簡単に受け入れられるだろうか。そう考えると、命を数字として扱うことの危うさに気付かされる。平和について考えるとき、この二つの正義はしばしば衝突する。戦争では、多くの人々を守るためという理由で少数の犠牲が容認されることがある。しかし、その「少数」に選ばれた人々にも家族や夢があり、人生がある。平和とは単に戦いがない状能ではなく、一人ひとりの命や尊厳が大切にされる状能ではないだろうか。

だから僕は、正義とは「誰かを切り捨てるための言葉」であってはならないと思う。もちろん、現実には全員を救える選択肢がないこともある。しかし、そのような状況であっても、犠牲になる人の存在を忘れず、苦しみを当然のものとして扱わない姿勢が必要だと思う。正義を掲げる人ほど、自分の正しさを疑う勇気を持たなければならない。平和な社会を築くために大切なのは、自分だけが正しいと思わないことだ。異なる立場の人の声に耳を傾け、自分の考えが間違っている可能性も認める。その積み重ねが対話を生み、争いを防ぐことにつながる。

僕は、絶対に正しい正義は存在しないと思う。だからこそ、僕たちは常に問い続けなければならない。「その正義は誰かを傷つけていないか」「本当に他の方法はないのか」と。平和とは完成された答えではなく、その問いを諦めずに考え続ける姿勢そのものなのだと思う。

知ることから始まる未来

北部中学校　２年３部　　伊藤　一穂

みなさんは、『土まんじゅう』という言葉を覚えているだろうか。小学五年生の国語の教科書にあった『たずねびと』という話に出てくるあの『土まんじゅう』だ。

僕は、この話を学んで、なぜか分からないけれど『土まんじゅう』を実際に見てみたいと強く思い、その年の年末に広島を訪れた。

主人公の「綾」と同じように『原爆ドーム前駅』で路通電車を降り、少し歩いて原爆ドームに向かう。木々が開けて原爆ドームが見えたとき、僕は一瞬動けなくなるほど「怖い」と思った。それまでテレビや社会の教科書で見てきた原爆ドームと何も変わらないはずなのに、息が詰まった。何がそんなに怖かったのか。それは、その時まで僕にとって【教科書の中の出来事】だった“この場所に原爆が落ちてたくさんの人が亡くなった”という出来事が【本当にあった事】なんだと実感したからだった。

原爆ドームの周りを歩き、『原爆死没者慰霊碑』に着くと、前に原爆ドームと平和の灯、後ろに平和記念資料館が一直線に並んだ。手を合わせようと人の列に並ぶと、周りにいたのは世界のいろいろな国の人たちだった。手を合わせ、平和記念資料館に向かおうとすると、その日がその年最後の開館日ということもあり、資料館の周りには二重三重に人の列ができていた。そこに並んでいたのも、世界のいろいろな国の人たちだった。

あまりにもたくさんの人の波に僕は資料館を諦め、『土まんじゅう』を探した。『土まんじゅう』は公園の奥まったところにあり、あたりは静かだった。この下に「名前でしかない人々」「名前でさえない人々」「数でしかない人々」「数でさえない人々」が眠っている。教科書の言葉が思い出されて、また少し「怖いな」と思いながら手を合わせていると、「どこから来たの？」と声をかけられた。そこにいたのはまるで『たずねびと』の話から出てきたかのようなおばあさんだった。数科書の話を読んでこの土まんじゅうを見たいと思い長野から来た事を伝えると、おばあさんは、「あなたのような若い人が原爆のことを知ろうとしてくれたなんて嬉しいわ」と笑ってくれた。僕は、「綾」と同じようにここに来た事を忘れないでいようと思った。

もう一度原爆ドームに戻り、またたくさんの世界の国の人たちを見て、ふと思った。これだけ多くの国の人がここに訪れているのになぜ戦争は無くならないのだろうか。

でもすぐにおばあさんの言葉を思い出し、それは違うと思った。世界の国の人たちも、僕と同じように、知るためにここに来ている。ヒロシマで何が起こったのか、どれだけの人が苦しんだのか、そして今日までをどのように生きてきたのか。知って、二度とこんなことがあってはいけないと平和の灯に約束し、それぞれの国に帰って伝えることだろう。それこそが戦争をなくすための小さな一歩なのだと思う。

僕たちにできることはなんだろうか。僕たちは平和学習で戦争の恐ろしさや当たり前のありがたさ、命の尊さを学んだ。「教科書の中の出来事」ではなく、「本当にあった事」であると胸に刻み、この平和学習で終わりにするのではなく、学び続けることが今の自分たちにできる、一番大事なことではないだろうか。

そこからきっと戦争のない未来が始まる。

『土まんじゅう』の下に眠る人たちが見たくても見られなかった未来を僕たちは生きている。

この先の未来を創るのは僕たちだ。

平和の世をこれからも願い続けて

長峰中学校　２年３組　　鷹野　柚珠奈

広島に原爆がおとされて八十一年がたとうとしている。八十一年前の八月六日に日本で初めて原爆が落とされた。原爆はたくさんの人の命をうばった。小さい子から高れい者の方までたくさんの方が亡くなった。原爆の影響でたくさんの人が今も後い症で悩まされている。とくに、いんしょうに残ってるのはガラスで目を切り右目が見えなくなってしまった女性。原爆が落ちてすぐは、治りょうもまともにできない環境でたくさんの方が、やけどなどで苦しんでいた。目が切れた方は、片目がかんぜんに見えないじょうきょうだった。当時の動画で見えない片目を看護師が開けていた。その目を見ると普通の目とは違い目の黒い部分は細長くとても普通ではないとすぐに分かるような見た目でした。その方は今も片目が見えずふべんな中、私達の世代や次の世代にも原爆のこわさを今までずっと伝え続けてくれている。

次に印象に残っているのは当時の様子をとった動画や絵。動画ではおもわず目を閉じたくなるほど、しょうげき的だった。全身にやけどをおった人。絵では水を求める人が川に流れている人、火のせいで上半身骨だけの人、見ていて当時の人の辛さなどが伝わってきた。

最後に印象に残ったのは、平和の像がつくられたゆらいの動画だった。ある女の子は、白血病になり、千羽つるを作れば病気が治ると信じ、毎日つるを折り続けていた。最終的には千羽以上のつるを残し亡くなってしまった。その話を聞いて、自分と近いねんれいで最後まで自分を信じて生きていたことにとても感動した。友達とまた笑いあって過ごす日々を夢みていたことは、女の子にとって、たのしみだっただろう。今、私が学校に行って友達にあって勉強して親や友達とけんかして安心して帰ってこれる家があることは、あたり前じゃないことを、あらためて、感じた。

平和学習をしてから、よりいっそう、親や友達などと過ごせている毎日を大切にしていきたいと思った。自分がこうして将来について考えられているのも幸せなことだと思う。

今も世界では戦争をしている。毎日どこかでなみだを流している人を忘れてはいけないと思った。今回学習して、絶対忘れてはいけないし、次の世代にもしっかり伝えていかないといけないものだと感じる。今もずっと世界のどこかでは、人々の平和を願い、一日でも早く戦争がおわることを願う人がいる。戦争はすぐには終わらないけど、一日でも早く終戦をしてほしいと心から願っている。世界中で戦争や核兵器がなくなることを願っています。世界の平和をこれからも守っていくには自分が動こう。一日でも早く終戦し、広島への原爆のことを忘れずにこれからも生きていこうと思えた学習でした。

祈りと叫び

長峰中学校　２年３組　　武井 唯華

八月六日、広島に原爆が落とされた。そして三日後の八月九日、長崎に原爆が落とされた。原爆は、放射線を放ち黒い雨を降らせた。燃え盛る町、がれきにつぶされ下じきになった人々、水を求めた人々の死体が流れる川、周りを見渡せば炎と血で町が赤く染まっていた。人々の笑顔は一瞬にして消え去り、当たり前だった平和な町はもう、どこにも無かった。赤くふくれあがった身体、焼けただれた皮膚、身体が欠損している人がたくさん居た。何が起こっているのか分からない。誰もがきっと、そう思っていた。ただ分かるのは、痛い。苦しい。あつい。苦しむ声がどこに居ても耳を通って脳に響いた。家族を探すために、助けるために、ここから逃げるために走った。走り続けても地ごくは続いた。赤い町を抜けた後に黒く枯れ果てたヒロシマがあった。

火がおさまった頃のヒロシマで、人々が押し寄せたのは病院だった。家族や自分自身の治りょうのために来る者、はぐれて見つからない家族を探す者と様々だった。病院内では、医者などが忙しなく動き続けていた。まともな治療なんて受けれなかった。応急処置の道具はすぐに底をつき、代わりに菜種油などが使われることもあった。少し時がたっても、身体だけじゃなく心にまでうじがわいてむしばまれていくようだった。

一人の少女が薬の包み紙で千羽以上の折づるを祈り続けながら折った。彼女はすぐに死んでしまったが、彼女の祈りは像として残った。どこまでも続く深く暗い絶望の中で、光と終わりを求めて彼女は祈ったんだ。もう二度と、こんな地ごくが訪れないように当時の人々の祈りと、悲しみや絶望の叫びを決して忘れないために世代をこえて彼女の祈りを受け継いでいくのが私達の使命だと、私は思う。

原爆は、人々の平和と命を奪いそれまでの戦争に一時の終わりを告げた。それからも、そして現代でも原水爆の開発や戦争は日本以外のたくさんの国で行われている。私は今の日常が好きです。学校のどこにいてもどこからか響く誰かの笑い声、友達や家族と笑って話す時間。その全てが尊く何よりも大切なものです。だから再びあの地ごくが今の大切な日常を犯すことがないように、今の日常を守るために全ての人に考えてほしい。当時の事も、何が正しいかなんてわかることは無いけど争いは何も生まない。罪の無い人の命をたくさん奪う正解なんて無い。全ての人であの時の祈りと、叫びと真剣に向き合って平和な世界を創りたい。あの時の犠牲を祈りを叫びを無駄になんかしない。人々が笑って生きる町で赤く燃え盛る町と黒く枯れ果てた町を思い浮かべたのは痛み苦しみ悲しみを絶対に忘れず二度と悲劇を生まないためだ。そのために、平和な世界を創るために私達は思いを受け継ぎ、祈り続ける、叫び続ける。どうか安らかにと、願いを込めて。

被爆国の私たち

東部中学校　２年２組　　内藤　恭花

平和ってなんだろう。幸せってなんだろう。平和学習を進めている間、ずっと私の心の中にある疑問でした。地球上にいる多くの人は平和を祈って、幸せを願って、日々を過ごしていると思います。でも、実際には戦争や貧困、地球温暖化などの大きな問題が発生しています。このような様々な問題に私たちはどうやって向き合っていけばよいのでしょうか。様々な問題の中でも、「核爆弾」について考えてみました。

1945 年８月６日８時 15 分。大きな爆弾が広島市の上空で爆発しました。その瞬間、たくさんの放射線が人、動物、植物、地域全体に降り注ぎました。人は焼けこげ、水は枯渇し、逃げ場などありません。そんな恐ろしい原爆で約 13 万人もの人が亡くなりました。水を求めて川に飛び込み、命を落とす人もたくさんいました。さらに、原爆の起こした問題は数年で終わるような物ではありませんでした。原爆が投下されてから何十年もの間、放射線による後遺症で苦しみ続ける人、食料が足りずに命を落としてしまう人、70 年以上経っても育たない作物。その威力は人間が計り知れないほど大きなものだったと思います。

私は以前、インターネットのとある動画で広島県の平和記念資料館に展示されていた「被爆再現人形」の存在を知りました。皮膚が爪までただれ、虚ろな目をした３体の人形は中学１年生だった私にもショッキングな映像でした。私と同じくらいの背丈の女の子、私よりも小さな男の子、その２人のお母さんのような大人の人。動画越しでさえ、とても印象的でした。この被爆再現人形を間近でみていたら、実際にこの光景をこの目で見ていたら、と考えるととても恐ろしく、不安になります。今は、本物が持つ事実性や被爆者からの「間違ったイメージが定着してしまう」や、「あんな物ではなかった」という声の重視により撤去されてしまったそうですが、私はこの被爆再現人形は今でも置くべきだと思っています。人形は実際とは程遠いものなのかもしれません。ですが、核爆弾を無くさなくてはならないという強い想い、被爆して亡くなられた方々の苦しみを被爆再現人形から少しでも感じることができると思います。実際に私も人形のおかげで核の恐ろしさを少し知ることができました。

核爆弾の生産、保有は今でも世界的に続いています。核兵器の恐ろしさを本当に理解した上で、防衛のために保有しているのでしょうか。それとも、自国の強さの象徴のために保有しているのでしょうか。そのせいで亡くなってしまう多くの人の気持ちを考えているのでしょうか。その爆弾は本当に必要な物なのでしょうか。日本は唯一の被爆国です。核爆弾の影響力を世界に伝えていくことが日本の使命だと思います。また、戦争は簡単にはなくなりません。終わりません。ならば、始める前に止めることが大切だと私は思います。核爆弾の使用が、生産がなくなっていく世の中になることを願っています。ですが、急に大きなことはできません。平和を願い、近くの人から少しずつ幸せにすることから始め、幸せの輪を世界中に広げていきたいです。

人と兵器

東部中学校　２年３組　　五味　芯太郎

中学２年生になった今年、僕は初めて非核平和学習を受けた。原爆が落とされた時にどのようなことが起こったのか、人々がどのような影響を受けたのかを、講演で聞いた。小学生の頃、印象に残ったテレビ番組がある。NHK の戦争を特集した番組だ。この番組では、戦場の死体の映像が止まることなく流れ続けており、当時の僕は強い衝撃を受けた。中学生になり、この時の記憶が講演を聞いて鮮明に蘇った。「あんなことが広島・長崎でも起きたのか。」そう僕は衝撃を受けた。

そんな思いの中、僕が非核平和学習を受けてきて感じた事は、「人と兵器の違い」だ。原子爆弾は、第二次世界大戦の最中、アメリカで行われていた極秘プロジェクト「マンハッタン計画」によって造られたもので、当時は原子爆弾は日本への使用を想定して造られたものではなかったという。しかし、実際に使用する予定の相手だったドイツが、原子爆弾の完成前に降伏したため、標的が日本に変わったのだ。僕はこの事実に最も衝撃を受け、同時に憤りも感じた。その後、八月六日午前八時十五分、広島に原子爆弾が投下された。凄まじい爆風、熱線、放射線が広島を襲い、被爆した人は皮膚が焼け爛れ、爆風に叩きつけられ、飛んできた瓦礫によって傷つけられるなど、正に広島は地獄絵図と化した。

この惨劇から僕が思ったことは、人による攻撃には感情、悪意があるが、核兵器や原子爆弾による破壊にはそれが無いということだ。戦争は人の感情・状況が複雑に入り混じって起きている。決して在ってはならない事だが、だからこそ、戦争は人の意思によって止めることはできる。しかし、核兵器や原子爆弾は人間が作ったものであるにもかかわらず、その力を完璧に制御することは出来ない。たった一回使うだけで、原子爆弾は凄まじい被害の無差別殺人ができてしまう。その攻撃には感情はなく、反省も生まれない。原子爆弾を戦争に使うことには、何の意味も成果も生まれないのだ。

だからこそ、僕は「人と兵器の違い」を理解し、日常にも繋げていくことが大切なのではないかと思っている。人は兵器と違い、意思が在り、心がある。言葉を使うことで様々な人と分かり合える。時に隔たりが生まれてしまっても、それを「暴力」で解決するのではなく、ちゃんと「言葉」を使うことで乗り越えることができる。人が生まれ持ったこの宝物を大切にすることが、世界から戦争を無くすことに一歩繋がるのではないだろうか。

この文章を読んでくださった人にも、僕の思いが伝わってくれればとても嬉しい。これからも戦争は起きてしまうかもしれない。だが、そこで諦めてしまうと、過去の犠牲になった人たちの思いが無駄になってしまう。そのような事は決して在ってはならないことだ。僕は、今回学んだ思いをしっかり持ち、広島で起こった出来事を忘れずに未来へ受け継いでいきたい。地球上の人たちが、毎日を笑って過ごせるように。

平和への誓い（令和８年広島平和記念式典より）

もしも「大切なもの」が一瞬で消えてしまったら、
どんな気持ちになるのでしょうか。

私たちが笑い合っているときにも、尊い命が失われている現状があります。
今もどこかで、当たり前の日常がうばわれています。

ぼろぼろになった制服。
黒く焦げたお弁当箱。
それは、当たり前の毎日を生きていた証です。
昭和 20 年（1945 年）８月６日、午前８時 15 分。
たった一発の原子爆弾が、人々の暮らしを、人生を地獄に変えました。
髪は焼けちぢれ、全身の火ぶくれが破れ、火傷した皮膚が垂れ下がった人々。
「痛いよ。苦しいよ。」
「助けて、お母さん。」
「死にたくない。」
「助けてあげられなくてごめん。」
死んでしまうつらさ、生き続ける苦しみは、想像することさえ恐ろしいことです。

私たちには、被爆体験を直接聴くことができる最後の世代として、
当時の記憶を事実として受け止める使命があります。
目をそらさず、知ろうとすること。
悲しい現実でも向き合うこと。
そこには、「生きたかった人々」、「生き続けた人々」の思いがあります。

私たちには、広島のこどもとして、行動する責任があります。
相手の気持ちを想像し、意見の違いがあっても認め、受け止めること。
平和への思いを、自分なりの方法で表現すること。
一人一人の小さな行動が、平和への後押しとなります。

平和とは、誰かからあたえられるものでなく、世界中の人々で創り上げるものです。
こどもである私たちも、その一員として平和への一歩を踏み出します。
かけがえのない「大切なもの」を、確かな希望を、未来へ届けるために。

令和８年（2026 年）８月６日

こども代表
広島市立高須小学校　６年　柿崎　由宇
広島市立高南小学校　６年　河野　和希